読み先習の論拠

読みの学習と書きの学習とを切り離して、まず読みの学習から進めるべきである、という考え方について、前回は、社会の要求度の違い、必要度の違いの面からこれを説明しました。今回は、学習効果の面からこれを述べたいと思います。

読みは理解行為であるのに対して、書きは表現行為です。表現するためには、その前提として、表現されるものが内になければなりません。

まず、表現されるものが内にあって、次にそれを表現したいという欲望が湧いて、それで表現行為が始まるのです。つまり、十分な習熟により十分な理解ができて初めて、その書く学習の動機が生まれるのです。

だから、今の“読み書き同時教育”では、書きの学習が表現行為になるまでにその漢字に習然していないので、単なる“字形の模写”つまり、機械的な書き取り学習に終わってしまうわけです。

これでは、ほんとうの書く力にならないのが当たり前です。テストすれば書ける漢字が、作文やノートには使われない、というのは、当たり前のことです。

そうではなくて、漢字の読みから進めて、その漢字の意義や用法について十分な理解を深める間に、字形についての認識を育ててやり、目をつむっても、その字形が頭の中に描かれるようになった上で、書く学習に移れば、今までのような書き取り練習をくり返さなくても、すぐに正しく美しい字が書けるようになります。このことは、実は、十数年にわたって、実際指導を通してすでに実証していることです。

書き取り練習からの解放

このように、読みと書きとを分離して学習させ、十分な読みの学習の後に書きの学習に移らせますと、学習がやさしくできて、しかも書き取り練習の時間を今までのようにたくさん取る必要がなくなります。

今まで、「国語が嫌い」という子どもは、ほとんど書き取り学習が嫌いで、それで国語が嫌いだと言っていたのです。子どもたちを、書き取り練習の苦労から解放してやれば、どの子も国語が好きになり、読書能力がつき、知識も自然と高まります。

書物を読んで、そこに書かれている内容を理解する、という仕事は

どんな学科の学習でも、最も基本的で最も大切な仕事です。国語があらゆる教科の基礎教科だと言われるのはそのためです。

言葉を数多く理解している者ほど読書能力が高いので、学習効率が高いわけです。私たちは、今こそ“読み”の力の偉大なことを知って、この学習に最大の努力をはらうべきだと思います。

さて、読み書き分離には、もう一つ理由があります。

「鳩」と「鳥」と「九」の秘密

“鳩”“鳥”“九”……この三つの漢字の中で、どの字が最も覚えやすくて、どれが最も覚えにくいか、と言われたら、だれだって“九”が最も覚えやすくて、“鳩”が最もむずかしいと答えるでしょう。

ところが、文字というものを全く知らない幼児、たとえば三、四歳の幼児にこの三つの字を読んでやりますと、すぐに覚えて読めるようになる漢字は“鳩”です。二、二回読んでやれば、たいていの子は覚えて読めるようになるのが普通です。

一番むずかしいのは“九”です。これは、小学校の一年生に、一年間学習させても“はち”などと読み違える子どもが 20 パーセントくらいあるほどです。

複雑な文字の方が覚える

このように、字形の複雑な文字の方が、印象的であって、記憶に止まりやすいのです。複雑だということは、記憶の手がかりが多いということであり、覚えやすいわけなのです。

ところで、“書く”ということになりますと、全く逆になります。最も覚えにくかった“九”が最も書きやすく、“九”や“鳥”が書けて初めて“鳩”が書けるのです。

だから漢字の学習は、まず、“鳩→鳥→九”という順行で“読み”の学習を進め、次に“九→鳥→鳩”という順序で“書き”の学習を進めるのが最も能率的だ、ということになります。

それで、字形が簡単で覚えにくい、たとえば“九”のような漢字は、読み書き同時でもよろしいが、“鳩”のような、覚えやすいが書きにくい漢字は、読み書き同時教育では無理なのです。“九”や“鳥”が書けるようになってから書くなら、すぐに書けるようになります。